



▲1株1株ていねいに

雅彦さんは、母のアサノさんと妹の美智子さんの手を借りながら、父の稔さんとともに約1000坪のハウスを経営しています。もともと稲作やなし栽培をしていましたが、33年前に稔さんが観葉植物を手掛けるようになり、8年前に雅彦さんが引き継ぎました。

就農する前は、サラリーマンだった雅彦さん。軽い気持ちで苗は、ヨーロッパなどから買いつけます。出荷できるようになるのに、アンズリウムは1年半ほど、パフィオペディルムは3年ほどかかるとか。「根気がいる仕事ですが、それだけに出荷する時の喜びは大きいですよ」と笑顔で話してくれました。



▲入念に雑草取りを

生き物を扱う仕事はやりがいがあります

生活に潤いや華やかさを与えてくれる観葉植物。今回は、花付き観葉植物「アンズリウム」と洋らん的一种「パフィオペディルム」を育てている太田雅彦さんを紹介します。



自慢の一品・腕 ―観葉植物づくり― 太田雅彦さん (古井町)

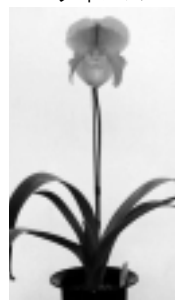
就農しましたが、思ったよりずっと難しいですね」と話します。「植物は生き物。その植物に合った環境に保つてやるのが一番大切です」の言葉どおり、冬はボイラーで暖房を。また、ハウス内が均一な温度になるよう、空気を循環させる装置も備え、温度管理を行っています。

もともと昆虫や魚を飼うのが好きだったという雅彦さん。「動物と植物の違いはありますが、生き物を扱う仕事ができるのも両親のお陰です」と感謝の気持ちを忘れません。

**いい物を作る
努力をいつまでも**

穂さんは「昔はそこそこの物を作れば売れたが、今はいい物でないと売れない。厳しい時代です」と話します。雅彦さんは、消費者の好みや動向を察知するため、インターネットや市場から常に新しい情報を得るよう心掛けています。「いい物を作る努力を続けていきたい」と話す目の輝きが印象的でした。

▼パフィオペディルム



▲アンズリウム

野草歳時記

120



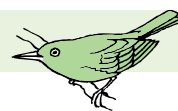
シラン びわつきゅう 〔百及ラン科〕

日本の野生ランで庭植えできる唯一の種類で、自生地は限られ、まれにしか見られません。年々大株になり、いも（偽茎）が数珠状に並びます。この偽茎を食べる人もいます。慢性胃炎、胃カタル、胃か

いようの吐血などに、乾燥した球根をせんじて飲みます。やけどや打撲傷には、生をすりおろして患部にはります。また、秋から冬にかけて、偽茎を掘り、皮をむき、ゆでて日干し乾燥すれば、消炎の止血剤としても利用できます。写真・文／三井亨氏＜城ヶ入町・安城市文化財保護委員＞

安城の野鳥

143



オオタカより小型ですが、姿や飛んでいる様子が非常によく似ているので、ベテランでもその識別は困難です。ワシタカの仲間は恐妻家で雌は雄よりも大きく、捕らえる獲物の大きさも違います。ひなが小さいうちは、雌がひなを守り、雄が小さい獲物を捕らえ、ひなが大きくなると雌が

巣から離れ、雄よりも大きい獲物を捕らえてくると言われています。写真・文／杉山時雄氏＜桜井町・西三河野鳥の会会員＞



ハイタカ ワシタカ科